

[資料紹介]

The Smithsonian Institution's Museum Support Centre (MSC)における 1887年所収の琉球コレクション

與那嶺一子¹⁾

Material Note

“The Ryukyu collection stored in
The Smithsonian Institution's Museum Support Centre (MSC) in 1887”

Ichiko YONAMINE¹⁾

I はじめに

在外の琉球・沖縄関連文化財については、これまで、何度か調査され、その概要は既にいくつか報告されている¹⁾。国外に保管される琉球・沖縄の文化財を紹介する展覧会も、浦添市美術館、那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館・美術館（以下 当館）で開催されており²⁾、王国時代から戦前期（明治、大正、昭和初期）にかけて収集された在外のコレクションについては、次第に明らかになりつつある。

しかし、残念なことに、在外の琉球・沖縄関連文化財調査の結果は、2014年に（一財）沖縄美ら島財団が発行したベルリン国立民族学博物館所蔵染織品の報告書（祝嶺恭子編）を除き、その詳細は殆ど知られていない。また、沖縄県教育委員会が実施した欧米の悉皆調査は1999年に終了し、その後の16年間で、継続調査はなされてこなかった。

今回、沖縄ソフトパワー発信事業³⁾の実施にあたり、渡米した際に、米国、スミソニアン協会のミュージアムサポートセンター（The Smithsonian Institution's Museum Support Centre / 以下MSC）にある琉球コレクション（MSCでは分類にあたって“RYKYUS”を使用しており、以後、琉球・沖縄文化財を琉球コレクションとする）を閲覧する機会が2度あった（2015年1月、2016年11月）。

MSCには1859年受入のペリー提督のコレクションや1982年の民俗資料などの琉球コレクションが収蔵されている。その内、1887年スミソニアンに

寄贈された10件は、琉球王国から沖縄県に移行して間もない時期の貴重な資料であり、2回の調査で得られた情報を報告することとした。

II Museum Support Centre (MSC) と琉球コレクションの概要

MSC (4210 Silver Hill Road, Suitland, Maryland 20746) は、メリーランド州にあり、1983年に建設された、スミソニアン協会のコレクションを保管する収蔵庫である。5,400万点以上の収蔵品は、フットボール競技場クラスの5つのセクション (Podsと呼ばれる) で構成される。1983年の建設当時、4つのPodsからスタートし現在に至っている (写真1・2)。

琉球コレクションは「AS EAS JAP RYUKYUS (アジア・東アジア・日本・琉球)」と分類され、収蔵されている。

第1回目の調査 (2015年1月) で大まかに確認した琉球コレクションを収蔵年で大きく分けると次のようになる。

1859年：ペリーコレクション (Commodore Perry's collection)

1887年：日本の文部省からの寄贈品 (Donation from the Japanese Ministry of Education)

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

- 1945年：戦後の収集品 (The collection gathered after world war II)
- 1964年：当時の工芸品・反物など (Craft work items from the 1960's)
- 1982年：民俗資料など (Folklore materials)

ペリー提督は1853年と1854年の2回、那覇に寄港している。王府は扇子、煙管の入った煙草入、白麻、白紗綾、芭蕉布、焼物、漆芸品などを、ペリー提督、ミシシッピ号、サスクエハンナ号の艦長、通訳、将校、提督の子息に贈っている。詳細はChang-su Houchins氏の報告書を参照されたい⁽⁴⁾。MSCにはペリーコレクションの博多帯が保管されていた。しかし、この資料は先の収集目録 (List of Official Ryukyuan Gifts) には記載されていない。

1887年には日本の文部省から琉球コレクション10件が寄贈されている。その詳細は次項にて述べる。

1945年のコレクションは朱塗の馬の鞍 (Saddle) と敷物 (Fiber Mat) であり、戦後、米軍関係者の収集品の一つと思われる。

1964年には、三線、紅型、漆芸品、張子人形が収蔵されている。紅型、漆芸品、張子は、使用された痕跡がなく、おそらく製作された直後に米国に渡ったものであろう。これらの作品の素材やデザインを見ると、簡易なお土産品という位置から脱し、新しい工芸の方向を模索する様子が見えてくる。新作ばかりだということから、1964年収蔵の資料は何らかの意図をもって集められたものと思われる。この目的は二つ考えられる。一つは在沖米軍関係者が沖縄で滞在中に入手し、米国に持ち帰ったもの。もう一つは、琉球・沖縄を紹介する展覧会のために集められたということである。

戦後、復興した紅型などの工芸品の購入先は、米軍人やその夫人たちであった⁽⁵⁾。MSCに保管される紅型作品のなかに、名渡山千鶴子⁽⁶⁾の作品が確認できた(写真3)。夫の名渡山愛順(1906～1970)が、1951年第2回国民指導委員として渡米した際に⁽⁷⁾スミソニアン博物館の沖縄コーナーで展示されているのを見ている。その作品は、WOMAN' S SHORT

OCATAK COAT (白地震に鶴亀岩梅松模様紅型羽織) (写真3) である。筆者が名渡山より聞いた話では、スミソニアン博物館へ収める目的で製作したのではなく、購入した誰かがスミソニアン博物館に提供したという事であった。

沖縄県立博物館・美術館の前身である沖縄県立博物館の記録によると、1958年、スミソニアン博物館で開催された「琉球文化財展」のために、文化財169点が貸出されている(1958年当時は琉球政府立博物館)⁽⁸⁾。この展覧会の詳細は不明だが、この点数から察するにコーナー展示というより、ある程度スペースの確保された展覧会であったことがうかがわれる。展覧会には琉球政府立博物館から貸出した資料以外にもその当時の工芸品が展示されていた可能性がある。その後、どのようなやりとりを経たのか不明だが、新作の工芸品がまとめて収められることになったのではないだろうか。

主な作品について記載しておく。() 内は筆者が付した日本名称である

- 1 SAMISEN (三線) ID : E402324
- 2 KIMONO (縮緬浅地扇に菊楓模様紅型衣装) ID : E402272
- 3 KIMONO (縮緬浅地震に牡丹尾長鳥菖蒲模様紅型衣装) ID : E402273
- 4 KIMONO (染分地鶴松梅桜模様紅型衣装) ID : E402274
- 5 WOMAN' S SHORT OCATAK COAT (白地震に鶴亀岩梅松模様紅型羽織) ID : E402276



(写真3) 白地震に鶴亀岩梅松模様紅型羽織部分

- 6 COVERED BOX (黒塗漆絵箱) ※紅型からヒントを得たデザインの作品

7 PAPER MACHE FIGURE BOY (張子：鯉乗り童子) 他張子人形が複数あり

この他、久米島紬、琉球緋の反物、読谷山花織帯などが収蔵されているが、収蔵年などの詳細を確認できなかった。しかし、作品の傾向などから、1964年収蔵と同時期ではないかと思われる。

1982年には鋸、杖、鞭、アダン葉草履、朱塗盆下駄、芭蕉布、三線などの民俗資料が納められているが、提供者は不明である。鞭、杖は複数点あり、朱塗盆には「仲西小学校」「創立三十五周年記念」の金文字が入る。芭蕉布は収蔵当時の作品ではなく着古されたものである。紅型の新作の風呂敷（黄色地牡丹模様）も含まれている。

III 調査結果及び考察

MSCのコレクションには紙のタグが付いている。それには、IDNo・分類・受入年・名称・バーコードが記されている。1887年の琉球コレクションは「Donation from the Japanese Ministry of Education (日本の文部省からの寄贈品)」との説明を受けた。資料にはタグの他にラミネートされた手書きメモが付されており(写真6)、それに「Dept. Ed. Japan」の文字が確認できた。

1887年は、琉球王国から沖縄県に移行し10年にも満たない時期であり、製作時期が明らかな貴重な作例である。琉球・沖縄の文化財を研究する際、製作年を考察する基準は、戦前期を知る研究者の成果に頼ることが多く、制作年が明らかな作品は少ない。王国崩壊による混乱や第二次大戦の戦禍による焼失などで、製作時期を特定できる染織資料が国内には殆ど残っていないこともその要因である。

ドイツのベルリン民族学博物館には、同時期に製作されたと思われる琉球コレクション(1888年収蔵)がある。1887年(米国)、1888年(ドイツ)と製作時期が明らかな作例が現存することは、今後、研究を進める上でたいへん大きな意味を持つてくる。

(1) 調査資料について

調査したのは右記10件である。採寸し写真撮影

を行った(写真4・5)。6件については、採寸データを元に作図をおこなった。

1. MAN'S SUMMER GARMENT
2. MAN'S WINTER GARMENT
3. SUMMER GARMENT
4. WOMAN'S UNDER-TROUSERS
5. MAN'S SUMMER CLOAK
6. MEN'S CEREMONIAL GIRDE
7. MAN'S CEREMONIAL UNDER-TRO
8. MODEL OF HAIR-ARRANGEMENT
9. PAPERS
10. POUCH & TOWEL

資料10件の内、1件は結髪模型、1件は手漉きの紙。残り8件すべて染織品である。結髪模型は土族男性を示すもので、紙は芭蕉紙と思われる。

染織品は7件が衣服、1件が装飾品である。MSCのタグをみると、わざわざ性別を付した資料があり、これによると、7件の内5件は男性の衣服である。残り2件は女性用である。装飾品1件は男性用か女性用か不明である。結髪模型から推測できるように、これらの染織品は土族階級のものである。

琉服では揚げの位置が2例みられる。一つは、袖下あたりの身頃にあるもの、もう一例は衿下位置に施すものである。前述例は男性用で、後述例は女性用と伝えられているが、このコレクションからもそれが確認できる。

また、男性用の琉服2例には袖付の下部にある三角形の襦(ワチスビ)が無く、袖付けが切り込まれた形(人形と呼ばれる)になっている。和服の男性用と同じ形態、縫い方である。ドイツ、ベルリン民族学博物館にも同様の類例が残っている。このような形にすると、太目の帯を結ぶ場合、袖が身頃に全て縫い付けられている場合より腕が動かしやすく、日本の和服の影響を受けて普及しだした様子がうかがえる。女性の場合、琉球王国時代、帯をせずに着装していたが、明治以降、和服へと移行するなかで、琉服にも身八口(女性は身八口、男性は人形と呼ぶ。女性は身頃も袖も縫いとじることはなく、開いている。男性は袖も身頃も縫いとじる)をつけ、帯で身頃を締めるようになる。

布帛素材は、木綿、苧麻、絹が確認できた。帯は

中国製の絹織物（縹子地浮織物）である。琉服3件は紹織、花織など、沖縄県指定無形文化財「首里の織物」にみられる技法である。装飾品のPOUCH（宝蔵）は紫地の木綿布に箔押しされたものである。琉球王国時代、間得大君の礼装に「地染の絹に金、銀、雲母を摺ったいわゆる印金」があったようだが⁽⁹⁾、それは現存しない。金武町屋嘉の芸能衣裳の紅型で部分的に箔押しされたものが唯一の作例である。また、宝蔵は煙草入れとして使う以外に、贈答用に使われる事例がみられる。模様を染めた形付宝蔵も史料にみられ⁽¹⁰⁾、19世紀、士族たちが使った宝蔵は、このような作例ではないかと思われる。POUCH（宝蔵）には、紅型のTOWEL（手巾）が結びつけられている。このような紅型や花織による装飾的な手巾は手拭としての実用品ではなく、飾りであったことがこの作例からも実証された。

染織品の素材・形態の詳細は、後述の資料データに記載した。

資料を整理するために、日本語名称を、沖縄県立博物館・美術館の例を参考に筆者が付けた。英語名称はMSCのタグに書かれている名称である。（ ）内は沖縄で広く普及している呼称を採用し筆者が付した。

（2）寄贈の経緯について

1887年のコレクション受入の背景は次のとおりである。スミソニアン博物館とワシントンD.C.に駐在した特命全権大使九鬼隆一（1852～1931/1884～1887年駐在）の協議によって贈られたものが、日本の文部省からの寄贈品である⁽¹¹⁾。寄贈された文物は琉球に限らず日本全体を俯瞰できるものだったようで、その内、琉球コレクションは25点であったと伝わる。しかし、筆者がMSCで確認したのは10件であった。

コレクションの収集には文部省が設置した東京教育博物館が関わった可能性が高い。高安藤の論文「米国所在の沖縄コレクションの移動の背景」には、1881年東京教育博物館の館長職にあった手島精一（1850～1918）が関係していると述べられている。手島は九鬼とも交流があり、欧米の博物館と資料の交換をするなど日本文化の普及に尽力していたが⁽¹²⁾、1887年当時、手島は東京教育博物館を辞

している。

日本の文部省は1871年東京神田の湯島聖堂内に設置され、教育博物館が設立されるのが1877年である。琉球コレクションが寄贈された1887年当時、東京教育博物館は文部省総務局の付属となり、館長職が廃止され、主幹が置かれるといった状況であった。

1888年のベルリン国立民族学博物館の琉球コレクションの収集には、現在の東京国立博物館が関わっており⁽¹³⁾、この例と同様に東京教育博物館が教育的交流を目的として寄贈し可能性は大きい。

ドイツの場合、資料の収集には3年（1882年～1884年）を費やしている。そして、沖縄側から八等属野村道安、御用掛本村朝昭、物品提供者として那覇市東村の宮城仁王が関わっている。MSCの琉球コレクションにもこのような沖縄側の関係者がいたものと思われるが、今のところ、これ以上の追求は難しい。

（3）調査を終えて

2回の調査を実施したが、各々2時間の短時間であったため、十分な調査だったとは言えない。今回の調査で知りえたことを報告することで、マイクロスコープによる拡大写真撮影、非破壊による色材分析など次のステップへと可能性が広がることを期待している。

IV まとめ

欧米には、スミソニアン協会やベルリン国立民族学博物館以外にも、琉球コレクションを保管している博物館があるが、そこには必ずしも琉球史の専門家が配置されているわけではなく、資料整理が滞っている現状がある。

沖縄側では、少しでも多くの琉球コレクションの情報を求めており、これまでの悉皆調査の成果を踏まえ、さらに一歩進んだかたちで、例えば写真データ、採寸図面、素材データなどを加えた情報公開が望まれている。そのためには、在外の博物館等と相互に交流し合うことが必要であり、より研究を深めるためには、相互がリンクしさらに多くの人たちが

活用できるシステムを今後構築することが求められてくるものと思われる。この報告がその第一歩となれば幸いである。

最後に、調査にあたっては、スミソニアン自然史博物館 (National Museum of Natural History) に勤務している知念淳子氏に資料閲覧の労を取って

もらった。また、長時間にわたり対応してくれたMSCのCarrie Beauchamp氏に記してお礼としたい。

掲載したミュージアムサポートセンターに保管されている琉球コレクションの写真は與那嶺が撮影した。当館の館長田名真之には宝蔵についての情報を提供してもらった。

註

(1)

〔調査〕

1986年 ヨーロッパの染織調査 大城志津子 (沖縄県立芸術大学)

1990～94年度 在米国沖縄関連文化財調査 沖縄県教育委員

1992～93年 ベルリン民族学博物館他調査(染織) 祝嶺恭子 (沖縄県立芸術大学)

1995～99年度 在外沖縄関連文化財調査 (欧州) 沖縄県教育委員会

1997年 メトロポリタン美術館他調査 (染織) ルバース吟子 (沖縄県立芸術大学)

2003～06年度 北京故宮博物院沖縄関連文化財調査 沖縄県教育委員会

〔報告〕

沖縄県文化財調査報告書第124集『在米国沖縄関連文化財調査報告書』沖縄県教育庁文化財課 1996年

沖縄県文化財調査報告書第139集『在欧沖縄関連文化財調査報告書』沖縄県教育庁文化課 2000年

沖縄県文化財調査報告書第147集『北京故宮博物院沖縄関連文化財調査報告書』沖縄県教育庁文化課 2008年

ルバース吟子「在米国沖縄関連染織品調査報告」『沖縄染織研究会通信』沖縄染織研究会 1999年

祝嶺編『ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書〈資料編・図版編〉』一般財団法人 沖縄美ら島財団 2014年

(2)

〔展覧会〕

1992年 浦添市美術館 「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展」ーヨーロッパ・アメリカ秘蔵ー

2004年 那覇市歴史博物館 中国故宮博物院所蔵「帰ってきた琉球王朝の秘宝」展

2008年 沖縄県立博物館・美術館 中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」展

(3)

沖縄ソフトパワー発信事業 (沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課の事業)

沖縄の自然環境と個性豊かな文化や平和を希求する心を、沖縄のソフトパワーとして発信し、世界の人々の共感を呼び起こし、理解につなげ、沖縄が目指す将来像の実現を図ることを目的に、2014年～2016年に実施。総まとめとして2016年11月～2017年1月まで、ワシントンD.C.在のジョージワシントン大学附設博物館・テキスタイル博物館 (The George Washington University Museum The Textile Museum) と共催で “Bingata!, Only in Okinawa (紅型展)” を開催した。

(4)

p140-143, Chang-su Houchins, “Artifacts of Diplomacy: Smithsonian Collections from Commodore Matthew Perry’s Japan Expedition (1853-1854)” Smithsonian Institution Press, 1995

(5)

P328, 與那嶺「第一節 伝統文化の復興 1工芸」『なは・女のあしあと 那覇女性史 (戦後編)』那覇

市総務部女性室 2001年

(6)
名渡山千鶴子(1909年～?)：戦後、城間榮喜に師事。紅型復興に尽力する。没年について詳細を確認できなかった。

(7)
P152『名渡山愛順が愛した沖縄 名渡山愛順展』
沖縄県立博物館・美術館 2009年

(8)
P167『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館
1996年

(9)
P1-3 鎌倉芳太郎「古琉球型紙の研究」『古琉球型紙』(株)京都書院 昭和39年

浦添型は上布や木綿をあらかじめ紺、緑、水色の無地に染め、その上に型紙をあてて、蒟蒻糊を混ぜた黒、白灰、淡青の絵具を摺り込んだものであったと聞きます。近世では沖縄の祭礼の統率者聞得大君の礼装として地染の絹に金、銀、

雲母を摺ったいわゆる印金のものを納めたと言います。浦添型の摺込のものは浦添地方の巫女達の礼装で50才以上の婦人の着用したものであって、すべて神衣であったことが特色です。

(10)
P538「仲尾次政隆翁日誌」『日本庶民生活資料集成第二十七巻』三一書房 1981年
*安政二年(1855年)の記述に仲尾次が「形付宝蔵」を世話になった女性達に贈っている様子が記されている。

(11)
高安藤『米国所在の沖縄コレクションの移動の背景』
／<http://amview.japan.usembassy.gov>／2008年

(12)
P13-15『手島精一先生遺稿』1916年

(13)
佐々木・萩尾・與那嶺「農商務省より独逸宛の沖縄関係物品目録について(上)」『沖縄県立博物館紀要第二十二号』沖縄県立博物館 1996年



写真1 Museum Support Centre (MSC) の建物



写真2 MSC内。収納の様子



写真4 調査の様子 (2016.11)



写真5 調査の様子 (2016.11)



写真6 資料の付されているタグと手書きメモ

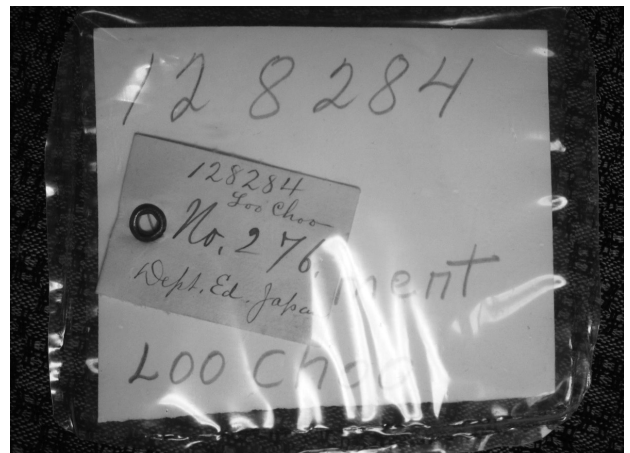


写真7 手書きメモ

1 MAN'S SUMMER GARMENT (*Tanashi*) 芭蕉経縞絹織衣裳

資料No.E128283

受入年：1887 (明治19) 年

寸法：丈：134.4cm 袖：68.4cm

素材：経糸：芭蕉， 緯糸：芭蕉， 白糸：絹

織密度：計測できず (1cm間)

技法：紹織 布幅：36.0cm

模様：経縞

単衣(タナシ)。男性の夏衣裳。"MAN'S SUMMER GARMENT" とラベルに英語の表記あり。

士族男性の衣裳であること、紹織という特殊な振り織であることから、首里で織られたものであろう。

袖付下に襦がなく、和服のように人形があいている。

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed. Japan)

Dimensions: Length 134.4cm, Sleeves length 68.4cm

Yarns: Warp: basho, Weft: basho, stripes: silk

Technique: Ro-ori (gauze weave)

Design: Vertical stripes

Maker (Location): Shuri, Okinawa

Unlined garment, summer costume of the man

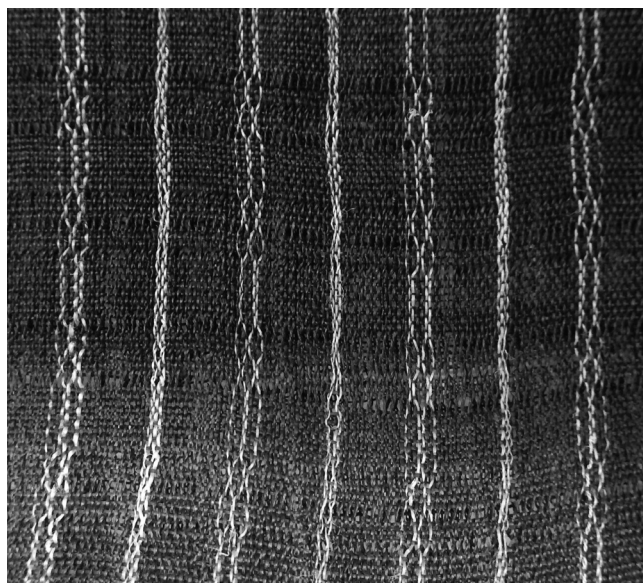
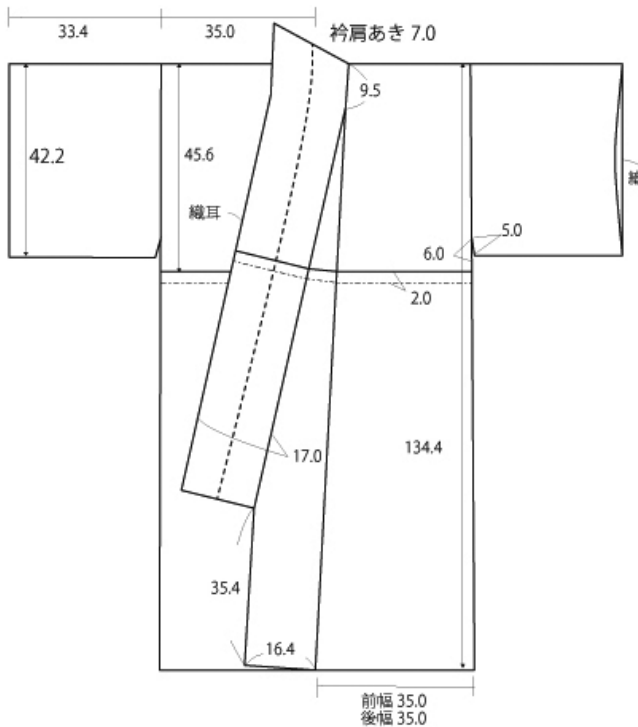


写真8 MAN'S SUMMER GARMENT 模様部分

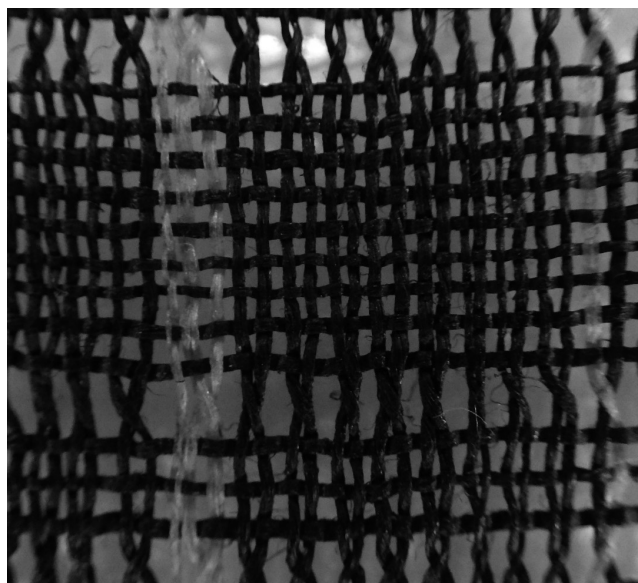


写真9 MAN'S SUMMER GARMENT 部分拡大

2 MAN'S WINTER GARMENT 木綿コージャー花織衣裳

収蔵番号：E128284

受入年：1887（明治20）年

寸法：丈：132.8cm 衿：66.4cm

素材：経糸：木綿， 緯糸：木綿

織密度：経24本， 緯20本（1cm間）

技法：両面浮花織 布幅：35.6cm

模様：ヤシラミ（経糸、緯糸双方とも紺、白を繰り返して模様を造り出す）

琉服の単衣。ラベルには男性の冬着とある。古いラベル2枚には「12828H Loo Choo_ No.276 Dept. Ed. Japan」とある。

冬物はワタジン（綿衣）、アーシジン（袷）と呼ばれるが、いずれも裏布のある袷のことを示す。英語のタイトルから、木綿の単衣を冬物として着用していたことが分かる。

コージャーは、経糸と緯糸の色が異なって織る布のこと。

経糸は白、緯糸は紺が使われている。

士族が身に着ける花織なので、首里で織られたと考えられる。

Year: 1887

Dimensions: Length 132.8cm, Sleeves length 66.4cm

Yarns: Weft: cotton, 24 yarns per cm

Warp: cotton, 20 yarns per cm

Technique: Hana-ui

Design: Checked pattern

Maker (Location): Shuri, Okinawa

Unlined garment, costume of the man

Old label : 12828H Loo Choo_ No.276 Dept. Ed. Japan

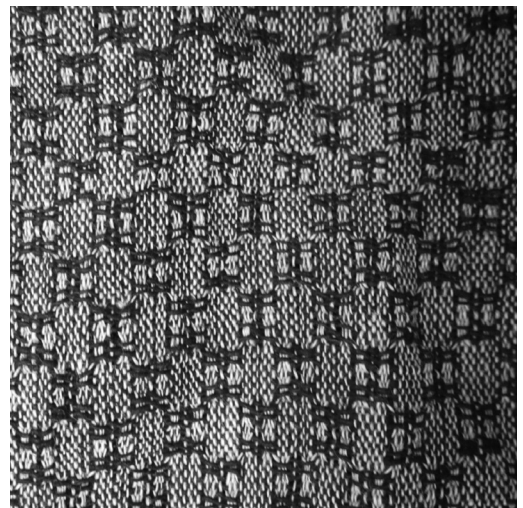
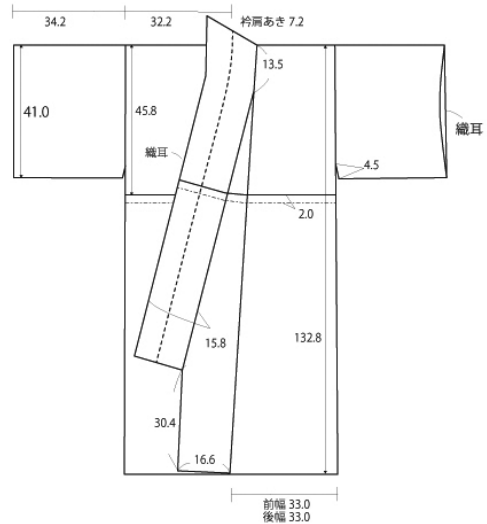


写真10 MAN'S SUMMER GARMENT 部分拡大

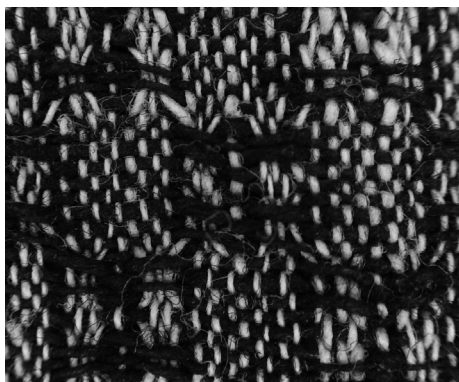


写真11 MAN'S WINTER GARMENT拡大（表）

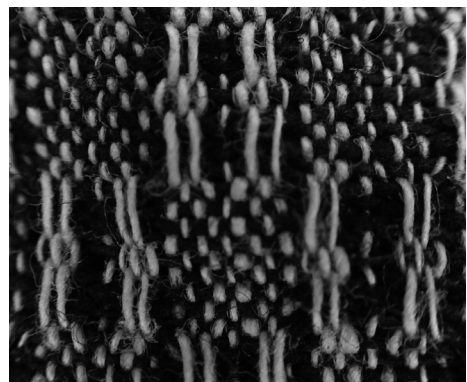


写真12 MAN'S WINTER GARMENT拡大（裏）

4 WOMAN'S UNDER-TROUSERS (*Hakama*) 木綿ハカマ

収蔵番号：E128287

受入年：1887 (明治20) 年

素材：経糸：木綿， 緯糸：木綿

技法：平織

模様：白無地

琉服の女性用のハカマ (下着)。

No. E128287

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed.)

Yarns: Weft: cotton, Warp: cotton

Technique: Plain weave

Woman's under wear



写真16 WOMAN'S UNDER-TROUSERS

5 MAN'S SUMMER CLOAK (*Dujin*) 苧麻胴衣

資料No.E128288

受入年：1887 (明治20) 年

寸法：丈：83.5cm 衿69.2cm

素材：経糸：苧麻， 緯糸：苧麻

織密度：経14本， 緯18本 (1cm間)

技法：平織 布幅：39.2cm

模様：白無地

琉服の胴衣 (ドゥジン)。No.E128291のハカマと対で着用するもの (下着)。男性用とラベルには書かれている。袖付下には襞は付いておらず、脇は丸く割られている。裾も直線ではなく丸くカーブを描いている。経糸、緯糸ともに縞り繋ぎ。糸は撚糸されていないので、桐板 (中国からの輸入糸) の可能性あり。

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed.)

Dimensions: Length 85.3cm, Sleeves length 69.2cm

Yarns: Weft: ramie, 14yarns per cm

Warp: ramie, 18 yarns per cm

Technique: Plain weave

Man's underwear, It is worn with MAN'S CEREMONIAL UNDER-TRO(NoE128291) pairwise

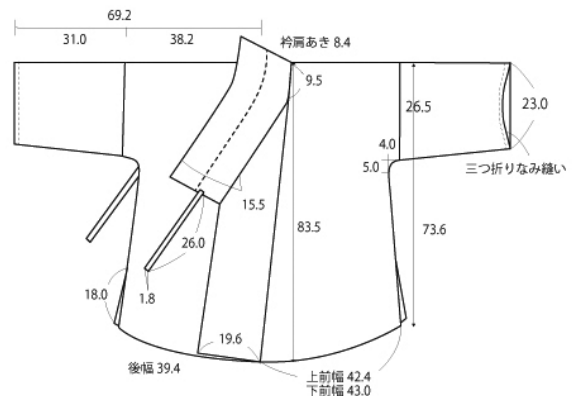


写真17 MAN'S SUMMER CLOAK

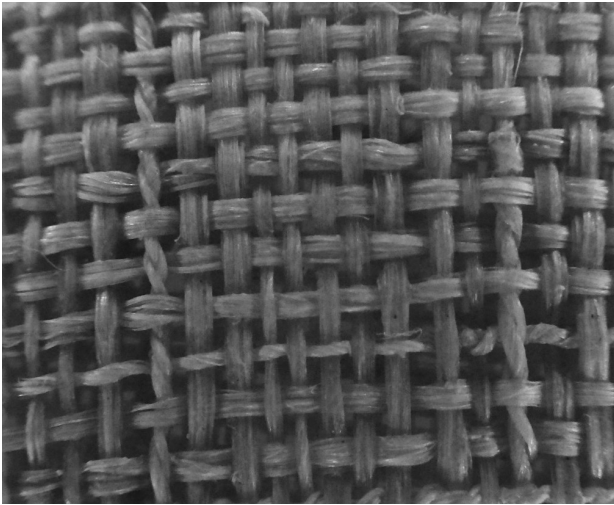


写真18 MAN'S SUMMER CLOAKの拡大

6 MEN'S CEREMONIAL GIRDE (Ufuubi) 大帯

収蔵番号：E128290

受入年：1887 (明治 20) 年

寸法：巾：17.6cm 長さ：186.0cm (帯のみ)

素材：経糸：絹，緯糸：絹，裏布：木綿

織密度：経糸 60 本，緯糸 28 本か (1cm間)

技法：縹子地浮織 (五枚縹子)

模様：蜀江錦模様

帯は結びの部分を作り、簡易に締めることのできる仕立帯 (作り帯)。帯の布帛は中国から入手した絹織物で、高位の士族が着用したものである。このような模様の作例は王家の衣裳にみられる。織りは、五枚縹子地に紋を織り出したもので、紋糸は別糸絡みか。図は裏面から描いたもの。

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed.)

Dimensions: Width 85.3cm, Length 69.2cm

Yarns: Weft: silk, 60yarns? per cm

Warp: silk, 28 yarns? per cm

Technique: Damask

High rank samure (jentry)'s ceremonial girde

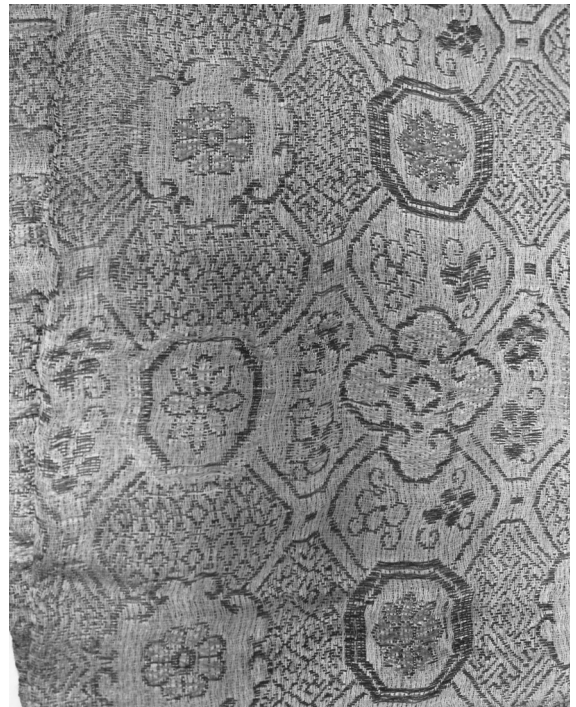


写真19 MEN'S CEREMONIAL GIRDEの模様部分

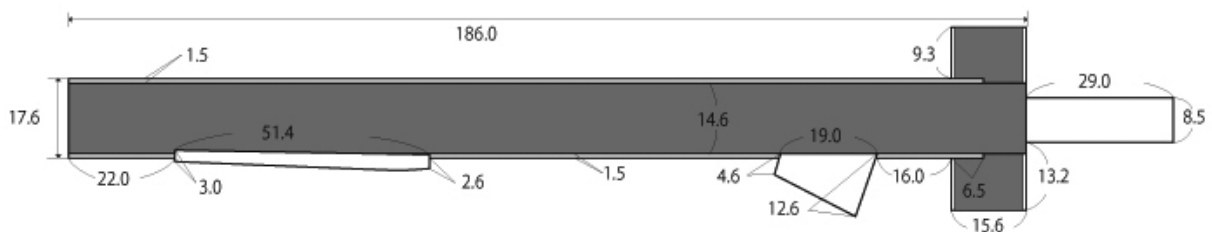




写真21 MEN'S CEREMONIAL GIRDEの拡大 (表)

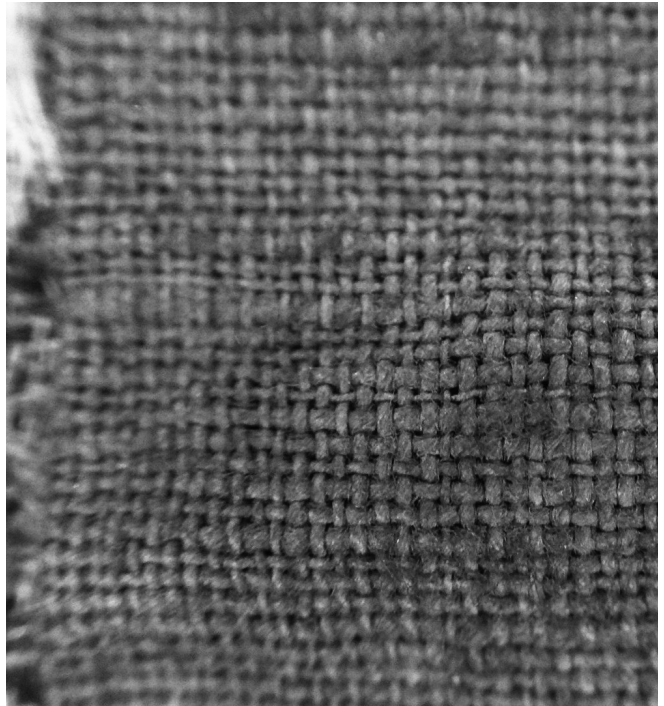


写真22 MEN'S CEREMONIAL GIRDEの拡大 (裏)

7 MAN'S CEREMONIAL UNDER-TRO (*Hakama*) 苧麻ハカマ

収蔵番号：E128291

受入年：1887 (明治 20) 年

寸法：丈：67cm、胴まわり部分を足すと 72cm

素材：経糸：苧麻， 緯糸：苧麻

胴まわり：木綿

織密度：経 14 本， 緯 18 本 (1cm間)

技法：平織

模様：白無地



琉服の胴衣。No. E128288 の胴衣と対で着用するもの (下着)。男性用とラベルには書かれている。古いラベル「12828H Loo Choo_ No. 276 Dept. Ed. Japan」あり。

経糸、緯糸ともに縀り繋ぎ。糸は撚糸されていないので、桐板 (中国からの輸入糸) の可能性あり。

ハカマの胴まわり部分の素材は木綿。

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed)

Dimensions: Length about 72.0cm

Yarns: Weft: ramie, 14yarns per cm

Warp: ramie, 18 yarns per cm

Another: cotton

Technique: Plain weave

Man's underwear (*Hakama*), It is worn with MAN'S SUMMER CLOAK (*Dujin*) (No. E128288) pairwise

Old label : 12828H Loo Choo_ No. 276 Dept. Ed. Japan

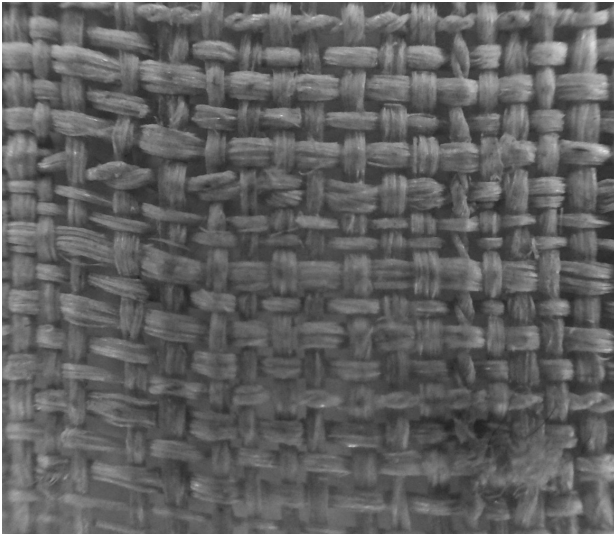


写真24 MAN'S CEREMONIAL UNDER-TRO拡大 (苧麻)

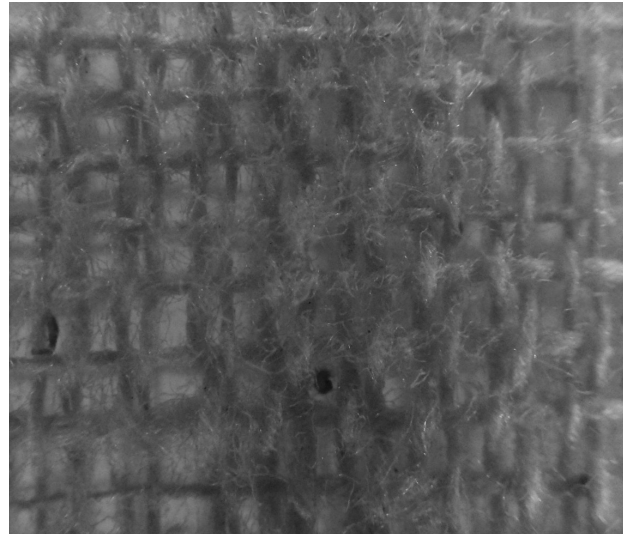


写真25 MAN'S CEREMONIAL UNDER-TRO拡大 (木綿)

8 MODEL OF HAIR-ARRANGEMENT 男性のカラジ結 (髪型) の模型

収蔵番号：E128293

受入年：1887 (明治 20) 年

男性のカラジ結いの様子が分かるような模型。二つの簪を使う様子もきちんと分かる。

ほぼ実寸なので、付け髪とも考えられる。今後の検証に委ねたい。

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed)



9 PAPERS 琉球紙

収蔵番号：E128297

受入年：1887 (明治 20) 年

寸法：縦 23.3cm 横：33.0cm

素材：芭蕉か

琉球で漉かれた紙。複数あるように思えたがサイズは全て同寸で、拡大写真からも同じものと考えられる。繊維から、芭蕉紙と思われる。

No.: E128297

Year: 1887 (Donation from Dept. Ed)

Dimensions: 縦 23.0cm 横 33.0cm

These papers made in Ryukyu. There is the paper which assumed *Basho* materials



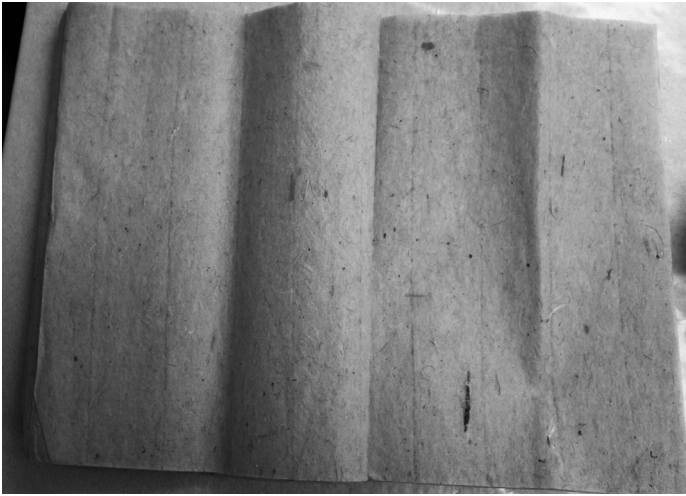


写真28 PAPERS

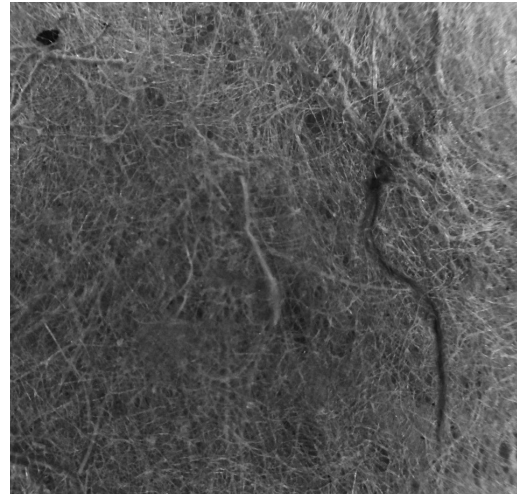


写真29 PAPERS (拡大)

10 POUCH & TOWEL (*Fuzo & Tisaji*) 宝蔵と手巾

収蔵番号：E128299

受入年：1887 (明治20) 年

寸法：〈宝蔵〉縦 9.5cm 横 16.0cm

〈手巾〉幅 32.2cm 長さ：54.0cm (結び目から計測)

素材：〈宝蔵〉木綿，〈手巾〉木綿，〈紐〉絹：宝蔵の口を閉じる糸は2本縫り糸を数本引き揃え

技法：〈宝蔵〉表：平織 箔押し，裏：平織，〈手巾〉平織、紅型 (型染・両面染)

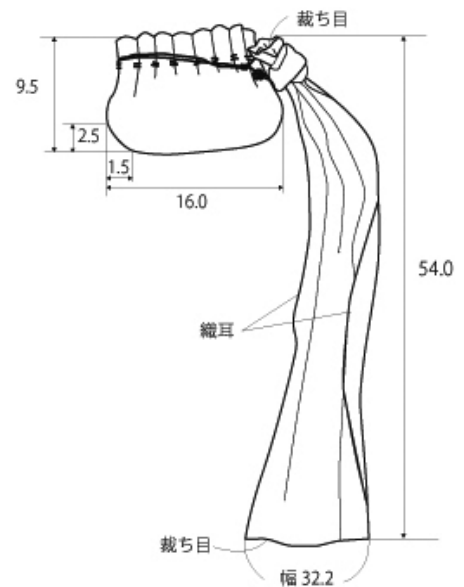
模様：〈宝蔵〉格子、蝶、梅花，〈手巾〉よろけ縞 (山道)

宝蔵 (フゾー) は煙草を入れるもので、布製は外出する際に持ち歩く。風俗画には煙管を付けて持ち歩く様子が描かれている。この宝蔵には紅型の手巾 (ティサジ) が結び付けられており、このようにセットで使われていたことがわかる貴重な作例となる。

宝蔵は型染だが、糊防染ではなく模様を直接染める浦添型 (菟莚型) と同様の技法による。金色の固着剤の詳細は、分析を待たねばならない。史料には贈答品として、「形付宝蔵」の名がみられる⁽¹⁰⁾。技法の面でも貴重な作例である。

宝蔵内側には赤い布と紺地縞布の裏がつく。

古いラベル「12828H Loo Choo_ No. 291 Dept. Ed. Japan」あり。



Year: 1887 (Donation from Dept. Ed)

Yarns: Pouch: cotton, Towel: cotton, String : silk

Dimensions: Pouch:Length 9.5cm Width 16.0cm

Towel:Width 32.2cm, Length 54.0cm

Technique: Pouch: Plain weave, foil stamping

Towel: Plain weave, bingata dyeing (Stencil dyed on both side)

Old label : H Loo Choo_ No. 291 Dept. Ed. Japan 12828



写真30 POUCH & TOWEL



写真31 POUCH内側



写真32 POUCH

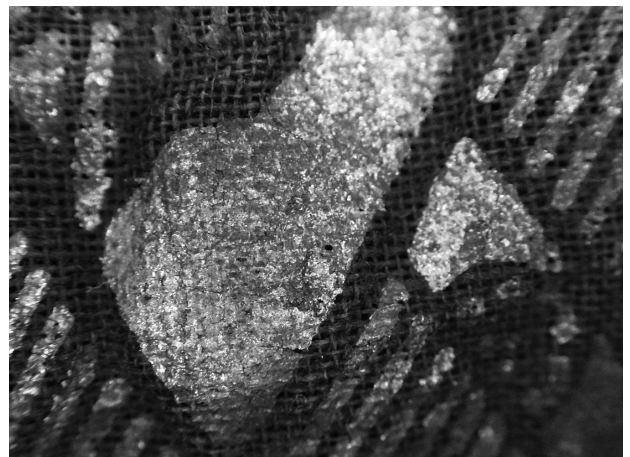


写真33 POUCH拡大



写真34 TOWEL 部分

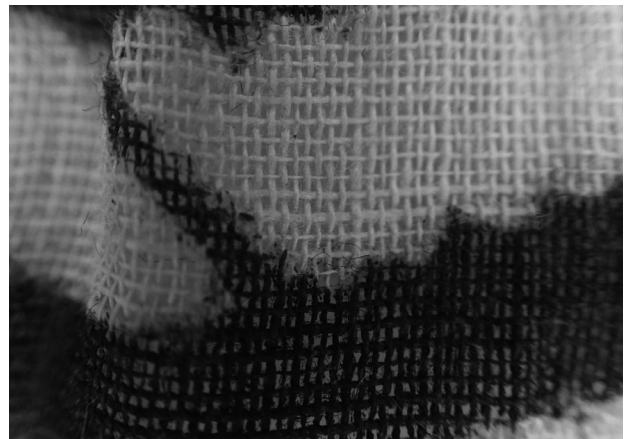


写真35 TOWEL拡大